

## 「この人に聞く」成熟社会と建築

茨城大学名誉教授・特命教授

三輪五十二



専門外でありながら、東日本大震災で流出してしまった岡倉天心創建の「六角堂」再建に携わった氏に、再建までのプロセスと今後の展望について伺った。

■再建プロジェクト設立までの経緯について教えてください。

六角堂は、明治38年に岡倉天心によって創建され、岡倉天心偉績顕彰会を経て、昭和30年から茨城大学が周辺の五浦地区を含め管理することとなりました。当時の六角堂は荒れ果て酷い状態でしたので、そこから建替えとも言えるような大改修を行ってきました。その六角堂が、2011年の東日本大震災によって、台座部分だけ残してすべて流れてしまいました。

その後、多くの方々から六角堂流失を惜しむ声が寄せられたのを受けて、学長の決断によって再建プロジェクトが立ち上げられ、ちょうどその頃、退官を控えていた私が特命教授として責任者に任命されました。

私の研究分野は生物学で、建築の専門家ではないのですが、以前から岡倉天心に興味があり、六角堂は北茨城の観光のシンボルとして慣れ親しんだ場所でしたので、自分の研究は一旦置いて、こちらに全力投球しよう決めました。そして、茨城県建築士会の協力の下、各分野の専門家による再建支援委員会を作ってください、専門家による検証の上で作業が進められる体制が整いました。

■再建においてどのようなことがご苦労でしたか。

最初に、六角堂再建にあたって創建当時の形に再建することを基本方針としました。しかし、創建当時の資料が乏しいため、茨城県を中心に写真の提供を呼び掛けて資料を集め、昔の六角堂を知っている方々に話を聞くところから始め、それと並行して、流失物の回収のための大規模な海底調査を4回行いました。これらの限られた資料を元に、基本方針である創建時の姿を辿っていき、各部材にもかなり拘って作業を進めていきました。

まず瓦は、改修時に葺き替えたのを、元の三州瓦の「棧瓦」に戻すため、愛知県高浜市の工房で新しく焼いてもらいました。天頂部の宝珠（擬宝珠）だけは、創建当時のものでしたので、破片を回収して復元したかったのですが、破片がそろわず作り直しました。ただ、宝珠の中に納まっていたと思われる、海中から回収された水晶の六角柱は、唯一の創建当時のものとして、その新しい宝珠に納めました。

次に木材ですが、水と腐食に強い「太郎杉」にあたりを見つけ、いわき市勿来<sup>なごころ</sup>の方から提供していただきました。岡倉天心生誕 150 周年に合わせて樹齢 150 年のものを選び、乾燥にかなり苦労しましたがスケジュール内で最大限時間を取って乾燥させて使用しました。

また、建物の彩色は、成分分析から当時神社仏閣に多く使用されていたベンガラを塗ることにしました。ベンガラは岡山県高梁市吹屋<sup>たかべ</sup>の、江戸時代から製造していた西江邸<sup>せいせい</sup>の方から、「ローハベンガラ」という古い天然ベンガラを寄贈していただきました。昭和の改修時にこの西江邸のベンガラを使用したと推測される記録も参考になりました。それに特殊な塗り方をするため、岡山まで塗り方を教わりに行きました。

そしてガラスは、当時日本にはこれ程大きな板ガラスを作る技術はなく、天心がアメリカで調達したものを使用しました。今回も当時の製法である「機械吹き円筒法」で作ったガラスをイギリスから輸入して使いました。

土台部分は、耐震上やむを得ず鉄筋コンクリートにしましたが、表面には元々使われていたものと、色、成分が良く似ている、福島県の「白河石<sup>しろがわいし</sup>」を貼り付けました。その他、創建当時にあった出窓、屋内の炉、床の間も再現し、向かいの岩の上に雪見灯籠も波に流されないよう工夫して再現しました。

■再建に携われ継承されるべきものはどのようなものとお考えですか。

明治 38 年創建当時の姿に戻すというのが一番の基本方針でしたし、そうでなければ文化財としての意味がありません。こういう文化財は歴史的なものであり、創建当時のものには、それを建てた人の気持ち、考えが備わっていて、それらを疎かにして改修を繰り返せば、そういうものが皆薄れてしまいます。

やはり創建当時の姿に復元するという、これが文化財を残していく上で、一番重要なことだと思っています。そうでなければ、継承して伝えていく意味がないですからね。創った人の思い、意図を伝えなければ、それは文化財とは言えないでしょう。

■「六角堂」再建が終わってのご感想をお願いします。

色々な方にご協力いただいたことに、大変感謝しています。技術的な面の協力もいただきましたし、それから、復興基金に多大なご協力いただきました。岡倉天心に思い入れのある人は、熱い思いを持っている人が多く、その方たちのおかげで再建することができました。

また、私自身も最初は専門家でなかったのですが、この 1 年間でさまざまな分野の知識、経験を得ることができ、非常に勉強になりました。

こうして創建当時の姿を再現しましたので、是非多くの人に来ていただき、実際にこの場に立って、岡倉天心の考えに思いを馳せていただきたいと思います。

■「六角堂」再建を終え、ほっとされたところかと思われませんが、これからの構想がございましたらお願いします。

五浦地区では、六角堂の他に岡倉天心の旧居と長屋門が登録有形文化財と成っており、この二つもかなり震災の被害を受けましたが、現在すべて復元されています。しかしながら、この五浦は、岡倉天心が日本美術院を作って拠点構えた、美術史では非常に重要な場所で、実は六角堂と天心邸以外にも重要な建物がいくつもあったのです。特に重要なのが日本美術院研究所でして、それを是非復元したい。それがあって初めて、この五浦地区に岡倉天心の精神が継承されるように思うのです。

将来的には、復興の記録を後世に残すための復興記念館の建造や、北茨城市との共同で、県の美術館から日本美術院研究所を通して六角堂まで行く道を「天心の道」として整備して、観光の目玉にできればと考えておりますので、引続き皆様のご協力をお願いしたいと思います。